

『拾遺和歌集』八三九番歌における表現の機能性

高井美和子

『拾遺集』卷第十三、恋三、八三九番歌、

題しらず

よみ人知らず

しめゆはぬ野辺の秋はぎ風ふけばとふしかくふしものをこそ思へ

の一首は、季吟『八代集抄』に「序歌也。とやかくうちふして者思ふさま也」と指摘される通り、本に「標」「秋萩」などの景物描写を置き、末に心情を詠む典型的な序歌といえる^①。当該歌の歌意は、恋のものの思いのために横になっても寝付くことのできない様子をうたうものであり、たしかにその主旨は下の句に集約されている。では、上の句に詠まれる「標」「秋萩」は下の句の寝付けぬ恋の思いとどのように関連するのか。以下、それぞれの歌語としての位相を探り、その機能を考察する。

一、「標」歌の位相

「標（しめ）」の意味するものは、大義として「何らかの占領域をしめすもの」ということになるだろうが、そこには占

有しなればならないという「神聖さ」が背景にあり、それを犯すということはすなわち「禁忌」を犯すことになる^②。その背景をふまえた上で、和歌に詠みこまれた「標」は設定された状況により多様に意味を変えている。ここで『萬葉集』以降『拾遺集』まで、「標」を詠みこんだ和歌について、その「標」の具体的な意味を確認したい。

『萬葉集』における「標」歌は全三三首である。これらを分類すると、大きく五つの型を見ることができよう（表1）。

A 宮廷・神事に関する占有域を示すもの：三首

二〇 あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

一五四 楽浪の大山守は誰がためか山に標結ふ君もあらなくに

一〇五一 美香原布当の野辺を清みこそ大宮所（一に云ふ）こと標刺し（一）定めめらしも

B 単に標識や占領域を示すもの：一首

一四二七 明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も

雪は降りつつ

C 呪術的背景を持つと考えられるもの：一首

一五一 かからむとかねて知りせば大御船泊てし泊まりに標結はましを

D 主に恋愛において人を占有するもの：二八首（例は一部）

二三〇九 祝らが斎ふ社のもみぢ葉も標縄越えて散るといふものを

二四八五 大野らにたどきも知らず標結ひてありかつましじ我が恋ふらくは

【表1】『萬葉集』における「標」歌の分類と和歌

分類	歌番号	部立	分類	歌番号	部立
A	二〇	雑歌	D	一三五二	譬喩
	一五四	挽歌		一五一四	夏の相聞
	一〇五五	雑歌		二二一三	譬喩
B	一四三一	春の雑歌		二四七〇	寄物陳思
C	一五一	挽歌		二四八五	寄物陳思
D	一一五	相聞		一七六五	正述心緒
	四〇〇	譬喩		二八五〇	譬喩
	四〇三	譬喩		三〇六四	寄物陳思
	四〇五	譬喩		三〇七七	寄物陳思
	四一七	相聞		三二八六	相聞

分類	歌番号	部立
d※	四〇四	譬喩
	二二一八	秋の相聞

五三三	雑歌
一二五六	譬喩
一三三九	譬喩
一三四一	譬喩
一三四七	譬喩
一三五一	譬喩

四一七五	
四二二一	
四二二一	
四二四七	
四五三三	

【表1】の末尾の「d※」の項目は、「D」の分類項に含まれるが、例外または特殊なものと考えられるため別項を設けた。すなわち、

四〇四 山守がありける知らにその山に標結ひ立てて結びの恥しつ

は戯笑歌のなかで男性の独占を譬喩的に示したものの、二二一八 我がやどに植ゑ生ほしたる秋萩を誰か標指す我に知らえず

は恋愛対象としての女性ではなく、妹または娘を示すものである。

さて、【表1】の部立の項目により、「標」はDの恋愛の状

況下における占有を示すものが圧倒的に多い。前述のように男性を独占する場合の詠は一例と例外的であることから、Dの「標」は男性が女性を独占または占有する意で詠みこまれていることがわかる。また、特に「寄物陳思」に置かれる四首には、序歌としての性格を認めることができる。

以上のように『萬葉集』では多様な詠まれ方が見られる「標」であるが、平安時代の和歌ではその数は極端なまでに減少する。三代集で確認すると(表2)、『古今集』には一例も見られず、『後撰集』にはわずかに三首、『拾遺集』では六首見られるが、『萬葉集』と『後撰集』『拾遺集』との全歌数を比較しても、減少の度合いは著しい。

『後撰集』の三首を先の分類にしたがって確認すると、B単に標識や占領域を示すもの

二八〇 うゑたてて君が標ゆふ花なれば玉と見えてやつゆもおくらん

D主に恋愛において人を占有するもの

一八三 ふた葉よりわが標結びしなでしこの花のさかりを人に散らすな

一九八 人しれずわが標し野のとなつは花咲きぬべき時ぞ来にける

となる。注目すべき点は、三首とも「標結ふ」行為の対象が「花」であることである。

【表2】『後撰集』『拾遺集』における「標」歌の分類と部立

『後撰集』			『拾遺集』		
分類	歌番号	部立	分類	歌番号	部立
B	二八〇	秋中	B	一六七 一〇二四	秋 雑春
D	一八三 一九八	夏 夏	D	五四六 八三九 一一三五 一二二二	雑下 恋三 雑秋 雑恋
					※ ※ ※ ※

注：☆は『後撰集』との重出、※は『萬葉集』との重複。

『萬葉集』以降『拾遺集』までの「標」歌の変遷を追ったが、平安時代には「標」が本来持つ「神聖さ」「禁忌」という意味合いを色濃く反映した分類AやCの詠み方は見られなくなるものの、恋歌としての詠み方は引き継がれていくことがわかる。

二、「標」結われる花

前項で確認したように、恋歌としての「標」歌は、「標」結いの対象を愛しい女性と見立て、その独占を比喩的に示すものであり、『拾遺集』八三九番歌(以下当該歌)もまたその系譜

『拾遺集』では「標」歌は六首を数え、数字上では増加しているが、その内訳は『萬葉集』から三首、『後撰集』との重出が一首、したがって『拾遺集』で新たに確認できる「標」歌は八三九番歌と、

B単に標識や占領域を示すもの、に分類される

一〇二四 標てこそちとせの春はきつつ見め松をてたゆく何かひくべき

の二首である。

平安時代に至り「標」歌の数が減少するのには、時代による詠み手の生活環境の変化が理由のひとつに挙げられよう。しかし、そのうえで特に『古今集』に一例もないのは平安時代に「標」歌がまったく詠まれなくなったということではなく、『古今集』そのものの編纂方針や意図にしたがって収集された和歌の中には偶然にも「標」を詠むものがなかったことによる考えられる。また『拾遺集』の用例のうち三首が『萬葉集』からの重複なのは、『拾遺集』が、天曆五年の『後撰集』編纂時に同時におこなわれた『萬葉集』古点作業の成果を経て、特に人麻呂や赤人の詠として万葉歌が多く収載された事情が大きく関わっている。

のなかにある。当該歌では「標結はぬ秋はぎ」となっているが、これは本来ならば、歌中の男性が「秋萩」に「標」を結うべきであったのに結わなかった、つまり愛しい女を独占しておけば良かった、という後悔の心情をうかがわせる表現をとっている。では、「秋萩」にたとえられた女性と、その独占を願った男性との関係はどのような程度であったのか。

『拾遺集』各巻の相関関係、あるいは配列構成については早く小町谷氏照彦氏^③、片桐洋一氏^④、小池博明氏^⑤、最近では中周子氏^⑥によって多角的に分析されてきた。特に『拾遺集』における恋三部の位置については、諸氏に共通する見解から「恋が終息へ向かいはじめた段階」ととらえることができる。そのような恋の進展状況下にある女性がよそえられた「萩・秋萩」とは、恋歌の歌語としてはどのような意味を持っているのか。

三、思慕の対象としての萩

『萬葉集』には「萩」は集中に詠みこまれた植物として最多のもので、一五〇首あまりにのぼる。それは山上憶良が秋の七草の一つとしてあげたことから知れるように、当時の生活状況において野山の萩に触れる機会が多かったことが理由に挙げられるが、それゆえ多様な秋の景物としての詠み方がされている。特に恋歌に対象を狭めて確認すると、「萩」が「さを鹿」の妻

であるという特徴的な発想をもとに、

一六〇九 宇陀の野の秋萩しのぎ鳴く鹿もつまに恋ふらく我
にはまさじ

などが見られるが、『萬葉集』では第一に愛でられる植物としての「萩・萩」であり、恋歌の「萩・秋萩」にはこれといった際だった定型はなく、したがって恋の心情を託す景物としては「なでしこ」「女郎花」などの植物と同様、女性に仮託した詠み方もされている。

平安和歌に至ると『古今集』では一五首、『後撰集』では一二首、『拾遺集』一六首とその数は激減する。これはもちろん『萬葉集』との歌集編纂意図のちがいもあるが、時代が下るにつれて和歌に詠まれる植物の数が増え、特にもの思いの心情を託す植物として春の桜が定着したことが大きかろう。「萩・秋萩」の景物としての和歌は『萬葉集』同様、多様性をもつが、『古今集』の

七八一 吹きまよふ野風をさむみ秋萩の移りも行くか人の
心の
や、『後撰集』の

三〇六 さを鹿の立ちならす小野の秋萩における白露われ
も消ぬべし

『拾遺集』の

一一一六 秋萩の下葉につけて目にちかくよそなる人の心を

の危惧を表すという類型が見いだされるのである。

四、序歌としての構造

当該歌は「秋萩」が風によってなぎ倒れる様子がうたわれている。「秋萩」を恋人の女性として右のパターンにあてはめると、愛しい女性が風にたとえられた外的障害に影響されるところを危惧しながら独寝をする詠者（男性）の姿を想定することができる。

ここで当該歌の恋三における位置を確認すると、

中宮のみやす所のもとに、萩につけてつかはしける

廣平親王

八三八 秋はぎの下葉を見ずは忘らるる人の心をいかで知ら
まし

題しらず

よみ人知らず

八三九 しめゆはぬ野辺の秋はぎ風ふけばとふしかくふしも
のをこそ思へ

中宮内侍

八四〇 移ろはぬ下葉ばかりと見しほどにやがても秋になり
にけるかな

となり、色移りゆく「秋萩の下葉」を詠みこむ和歌の間に位置する。こうした配列構成によって当該歌の「秋萩」も、表現こ

ぞみる

などのように、心情に引き当てられた「萩・秋萩」が詠まれるようになる。愛でる対象としての花よりも、色移りゆく下葉が多く詠まれるようにもなり、『萬葉集』に比較してより心情の表象としての性格を強めている。

さて、『拾遺集』当該歌の「秋萩」と同様に花を「標」結う状況をうたう和歌を見てみると、『萬葉集』では

四〇〇 梅の花咲きて散りぬと人は言へど我が標結ひし枝
ならめやも

一三四七 君に似る草と見しより我が標し野山の浅茅人な刈
りそね

などが、また平安和歌では前項で挙げた、

『後撰集』

一八三 ふた葉よりわが標結ひしなでしこの花のさかりを
人に散らすな

一九八 人しれずわが標し野のとなつは花咲きぬべき時
ぞ来にける

がある。こうした和歌に詠みこまれた心情を考察すると、どれも「標」の中の花が詠者にとって好ましくない状況を迎えることを危惧するものである。この場合の花は女性にたとえられており、したがって「男性」の、愛しい「女性」の環境や動向へ

そ無いが色移りゆく「秋萩」であることが連想される。そしてここから、かつて慣れ親しんだ女性が、自分から心変わりして別の男へとなびくという状況を「野辺の秋萩風吹けば」が表しているということになる。

このように見ていくと、当該歌の上の句の具象表現は、下の句の「物思ひ」という漠然とした心情の内実を、読者に鮮明に提示する機能を持っている。また、上の句の持つ「風に揺れる花」（「萩」には限定しない）という情景はきわめて一般的で、それゆえ読者は瞬時に映像化することができるので、それにともなつて下の句の恋の煩悶のさまが実感をともなつて理解されるという効果をも持っているのである。

以上、『拾遺集』八三九番歌における表現機能を『拾遺集』の配列構成とから考察したが、集中歌の映像性、連想性については『拾遺集』の配列構成の意図とあわせ今後の研究課題としたい。

【注】

※三代集の本文は『新編日本国歌大観』による。『萬葉集』の本文は『新編日本古典文学全集』による。ただし、ともに漢字仮名表記は私に改めた。

①『国文学』第四二巻八号 学燈社（佐藤和喜「万葉歌は平安和歌とどのようにつながるか」の項）

②秋山虔編『王朝語辞典』（古橋信孝「しめ」の項）（東京大学出版会 平成

一二年)

③小町谷照彦「拾遺集の本質―三代集の集結点―」(『国語と国文学』昭和四二年一〇月号)、「拾遺集恋歌の表現構造」(『国語と国文学』昭和四五年五月号)、新日本文学大系『拾遺集』「解説」(岩波書店)

④片桐洋一「『拾遺集』の組織と成立―『拾遺抄』から『拾遺集』へ―」(『和歌文学研究』二二号 昭和四三年一月、後に『古今和歌集以後』に所収)

⑤小池博明『拾遺集の構成』(新典社 平成八年)

⑥中周子「拾遺集恋部における贈答歌とその詞書」(『同志社国文学』六一 平成一六年一月)